

烈公のお茶を作った
御茶園台地



水戸市立千波小学校

6年2組
野澤はる菜

いただいた資料は、御茶園の郷土について調べている人から提供されたそうです。この資料によれば、徳川齊昭が産業としての茶業発展にこうけんしていたことがわかります。

◎石井商店さんに聞きました。

Q1 御茶園で使用していた井戸水を今でも飲用水として飲んでいるのですか？

A1 今でも井戸水を飲用水として飲んでいます。昔は、手動のポンプで井戸水をくみ上げていましたが、今は、電動ポンプでくみ上げています。

Q2 番屋付近には、エノキの大木があったのですか？

A2 エノキの大木ではなくて、モチノキの大木です。大人でも手が回らないほどの太い大木でした。根も枝も周囲に影響するため、ばっさいしました。現在は、切り株だけが残っています。

Q2 氏神様の祠（ほこら）は、今でもあるのですか？

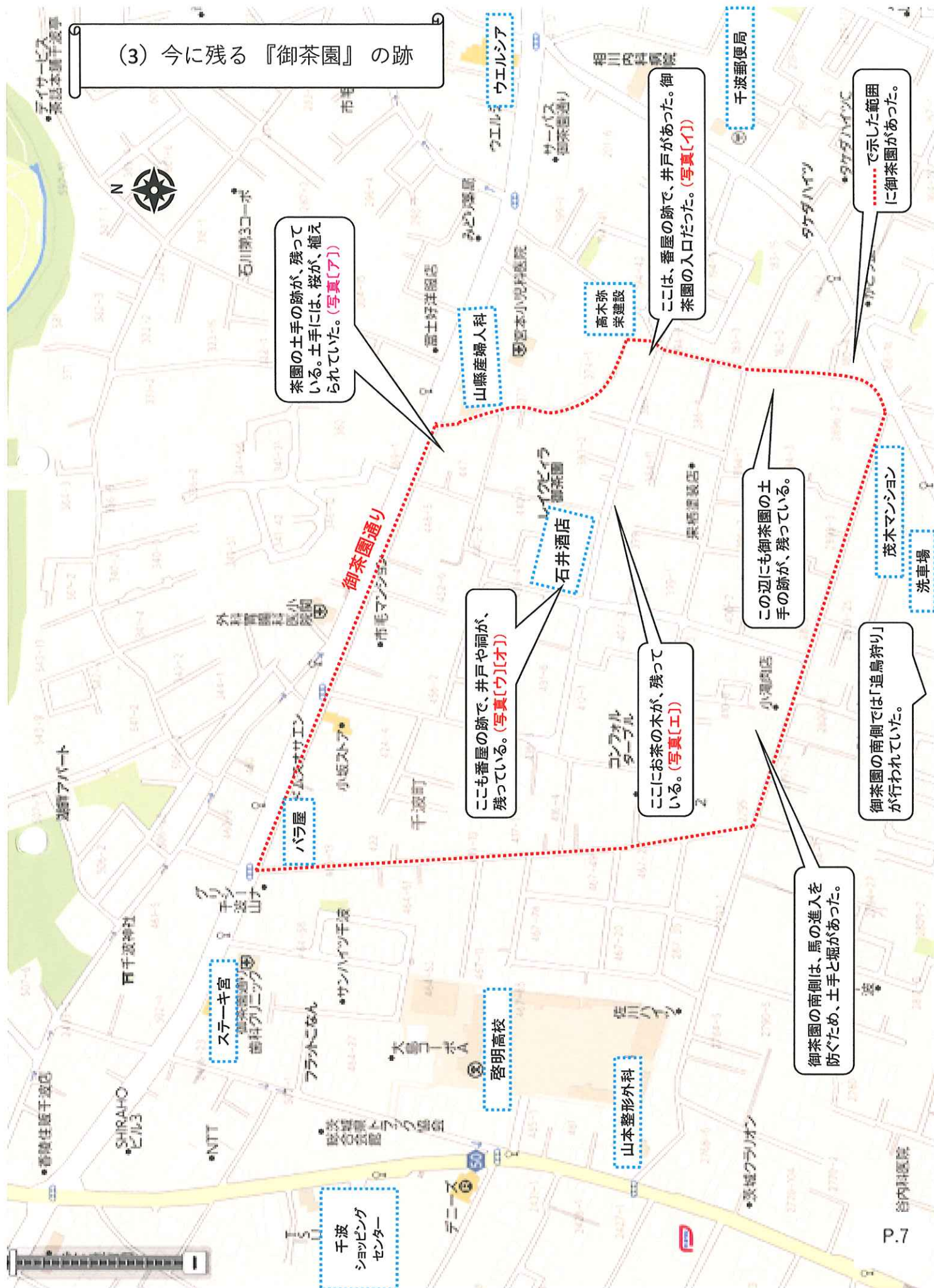
A2 店の横にあります。現在は、土台や屋根がモルタルで作られていますが、昔は、木製で作られていて、屋根には銅板が使われていました。（写真〔オ〕）



写真〔オ〕

最後に、石井商店のおじいちゃんから、御茶園（おさえん）の地名についてお話がありました。昔は、「おちゃえん」と読んでいたそうですが、いつのまにか「おさえん」と読むようになったそうです。市や県には「おちゃえん」という読み方に正すようお願いしたそうですが、結局、「おさえん」という読み方に決まったそうです。

(3) 今に残る『御茶園』の跡



茶園の土手の跡が、残っている。土手には、桜が、植えられていた。(写真[A])

ここも番屋の跡で、井戸や洞が、残っている。(写真[U][オ])

ここにお茶の木が、残っている。(写真[E])

ここは、番屋の跡で、井戸があった。御茶園の入口だった。(写真[I])

この辺にも御茶園の土手の跡が、残っている。

御茶園の南側は、馬の進入を防ぐため、土手と堀があった。

御茶園の南側では「追鳥狩り」が行われていた。

で示した範囲に御茶園があった。

4. 研究内容のまとめ

(1) 御茶園の地形・施設について

『御茶園』の跡を巡り、以下のような特徴がわかりました。

- ① 周囲に土手があり、土手には桜が植えられていた。
- ② 御茶園通りよりも高台になっている。
- ③ 追鳥狩りの敷地が南側に隣接していた。
- ④ 南側には堀が設けられていた。
- ⑤ 東側と中心部には番所、井戸が各所にあった。
- ⑥ 偕楽園に匹敵する程の広大な土地でお茶を栽培していた。

(2) 美しい風景

私は、『御茶園』の跡を巡りながら、広大なお茶畑の周囲に桜が満開となっている光景を想像していました。この敷地の広さは、地図上で確認すると、偕楽園の広さにひびきすることがわかりました。徳川斉昭は、『偕楽園』を造ったことで知られています。千波湖を中心とした美しい風景を造り上げていたのかもしれない。

(3) 産業発展への貢献

茨城県の茶業発展という視点で考えてみました。茨城県は、関東地方では埼玉県に次ぐお茶の生産地というデータがありました。中でも『奥久慈茶』『古内茶』『さしま茶』は、茨城三大銘茶といわれています。『奥久慈茶の里づくり協議会』『さしま茶協会』のホームページには、どちらも宇治茶の製法を導入していることや江戸時代後期に飛躍的に品質が上昇したと書かれています。このことは、石井商店さんでいただいた資料からも、徳川斉昭が茶業という産業の飛躍的な発展にこうけんしたことがわかりました。